

布施は不貪なり

R 3. 10. 22

於、加茂法話会

① その布施といふは不貪なり。不貪といふは、むさぼらざるなり。むさぼらずといふは、よのなかにいふへつらはざるなり。

② たとへば、すつるたからをしらぬ人にほどこさんがごとし。

③ 法におきても物におきても、面々に布施に相應する功德を本具せり。我物にあらざれども、布施をさへざる道理あり。そのものかろきをきはらず、その功の実なるべきなり。

④ 治生産業もとより布施にあらざることなし。

⑤ まことに、みづからに布施の功德の本具なるゆゑに、いまのみづからはえたるなり。

正法眼藏菩提薩埵四攝法

一者、布施。二者、愛語。三者、利行。四者、同事。

その布施といふは不貪なり。不貪といふは、むさぼらざるなり。むさぼらずといふは、よのなかにいふへつらはざるなり。たとひ四洲を統領すれども、正道の教化をほどこすには、かならず不貪なるのみなり。たとへば、すつるたからをしらぬ人にほどこさんがごとし。遠山のはなを如来に供じ、前生のたからを衆生にほどこさん、法におきても物におきても、面々に布施に相応する功德を本具せり。我物にあらざれども、布施をさへざる道理あり。そのものかろきをきはらず、その功の実なるべきなり。道を道にまかするとき、得道す。得道のときは、道かならず道にまかせられゆくなり。財のたからにまかせらるゝとき、財かならず布施となるなり。自を自にほどこし、他を他にほどこすなり。この布施の因縁力、とほく天上・人間までも通じ、証果の賢聖までも通ずるなり。そのゆゑは、布施の能受となりて、すでに縁をむすぶがゆゑに。

ほとけのたまはく、布施する人の衆会のなかにきたるときは、まづその人を諸人のぞみみる。

しるべし、ひそかにそのこゝろの通ずるなりと。しかあればすなはち、一句一偈の法をも布施すべし、此生他生の善種となる。一錢一草の財をも布施すべし、此世他世の善根をきざす。法もたからなるべし、財も法なるべし。願樂によるべきなり。まことにすなはち、ひげをほどこしては、ものこのこゝろをととのへ、いさごを供じては王位をうるなり。たゞかれが報謝をむさぼらず、みづからがちからをわかつなり。

舟をおき、橋をわたすも、布施の檀度なり。もしよく布施を学するときは、受身捨身ともにこれ布施なり、治生産業もとより布施にあらざることなし。はなを風にまかせ、鳥をときにまかするも、布施の功業なるべし。阿育大王の半菴羅果、よく数百の僧衆に供養せし、広大の供養なりと証明する道理、よくよく能受の人も学すべし。身力をはげますのみにあらず、便宜をすぎさざるべし。

まことに、みづからに布施の功德の本具なるゆゑに、いまのみづからはえたるなり。

ほとけのたまはく、於其自身、尚可受用、何況能与父母妻子（其の自身に於ても、尚ほ受用すべし、何に況んや能く父母妻子に与へんをや）。

しかあればしりぬ、みづからもちゐるも布施の一分なり、父母妻子にあたふるも布施なるべし。もしよく布施に一塵を捨せんときは、みづからが所作なりといふとも、しづかに随喜すべきなり。諸仏のひとつの功德をすでに正伝しつくれるがゆゑに、菩薩の一法をはじめて修行するがゆゑに。

転じがたきは衆生のこゝろなり。一財をきざして衆生の心地を転じはじむるより、得道にいたるまでも、転ぜんとおもふなり。そのはじめ、かならず布施をもてすべきなり。かるがゆゑに、六波羅蜜のはじめに檀波羅蜜あるなり。心の大小ははかるべからず、物の大小もはかるべからず。されども、心転物のときあり、物転心の布施あるなり。